

## 互いに尊重・共感し合い、関わりを深める学級・授業づくり —国語科を中核とした「論理的なスピーチ活動」を中心に—

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域  
荒木 智理

### I はじめに

本稿は、「互いに尊重・共感し合い、関わりを深める学級・授業づくり—国語科を中核とした『論理的なスピーチ活動』を中心に—」と題する。今回の学習指導要領の改訂は、中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』（2008年1月）に基づいて行われ、OECDのPISA調査等の結果から考えられる課題を指摘している。

- ・思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題
- ・読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題
- ・自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題（ は荒木による、以下同じ）

本稿では、以上のような日本人の課題や時代の要請を受け、児童が互いに認め合い（尊重・共感し合い）、自己肯定感を高められる学級・授業づくりを提案するものである。

### II 主題設定の理由

#### 1 今日的な教育課題から

21世紀に入り、子どもを巡る社会状況は大きく変化してきた。インターネットの普及や家庭の多様化等による人間関係の希薄化が、今を生きる子どもたちに大きな影響を与え、彼らのコミュニケーション能力の欠如が懸念される。また、インターネットや携帯電話等の普及や発達により、情報をインプットする量は圧倒的に増えた一方で、対人関係の中でアウトプットする量や機会は減ってきている。面と向かうことのないコミュニケーションから、対人意識のない子どもや自己中心的な子ども等が増加している。

#### 2 教育基本法の改正、学習指導要領の改訂から

教育基本法や学校教育法の改正を受け、平成20年に新学習指導要領が告示された。新学習指導要領では、「生きる力」をはぐくむという現行学習指導要領の理念を実現するため、指導面等での具体的な手立て（基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学習意欲の向上や学習習慣の確立等）を確立することを目指している。

教育内容に関する主な改善事項においては、「言語活動

の充実」が挙げられ、以下のように指摘している。

「言語は、知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤であり、国語科において、これらの言語の果たす役割に応じた能力、感性・情緒をはぐくむことを重視する」<sup>（注1）</sup>

「各教科等においては、国語科で培った能力を基本に言語活動を充実することの必要性を十分に理解し、言語活動を各教科等の指導計画に位置付け、授業の構成や進め方を改善する必要がある」<sup>（注1）</sup>

子どもたちの発達段階を踏まえ、教科等の枠を超えた学習の横断性や、学校段階・学年段階で、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図る学習の系統性が求められている。

#### 3 実習校の実態から

連携協力校（刈谷市立A小学校）は、児童数609名、学級数20（特別支援学級2学級を含む）の中規模校である（平成25年5月1日現在）。今年度、本校では、研究発表会を迎え、研究主題は、「生き生きと伝え合い学びを深めていく子どもの育成～確かな言語能力を習得し、伝え合う喜びを感じる授業づくり～」である。本研究では、国語科における「話すこと・聞くこと」を中心とした実践を行っている。

刈谷市は、自動車関連の企業が多数存在し、住民の流入出が激しい。本校の校区でも、転勤等による流入出があり、児童や家庭環境等の多様化が見られる。

本校の児童は、仲間意識が強く、誰とでも分け隔てなく仲良くすることができる。しかし、一方で、相手の立場に立った言動を取ることができない一面もある。

### III 国語科教育に求められること

#### 1 子どもの発達段階を踏まえた学習の系統性 —小から中高（12年間）への連携—

学習の系統性について、「国語科の改善の基本方針（中央教育審議会答申）」では、以下のように示されている。

「子どもたちの発達の段階を踏まえた学習の系統性を重視し、学校段階・学年段階ごとに、具体的に身に付けるべき能力の育成を目指し、重点的な指導が行われるようにする。その際、小学校においては日常生活に必要な国語の能力の基礎を、中学校においては社会生活に必要な国語の能力の基礎を、高等学校においては、社会人として必要な国語の能力の基礎をそれぞれ確実に育成するようにする。」<sup>（注2）</sup>

この基本方針を踏まえつつ、小学校では、日常に必要

とされる対話、記録、報告、要約、説明、感想等の言語活動を行う能力（「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」）を「全員に」確実に身に付けさせ、中学校・高等学校へ系統的・段階的につなげていくことが重要視されている。

## 2 全教科の中核としての論理的な「言語力」育成 —各教科学習・活動等への横断性—

新学習指導要領では、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力等の育成」が明記された。学習指導要領解説では、以下のように示されている。

「思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、観察・実験、レポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を発達段階に応じて充実させるとともに、これらの学習活動の基盤となる言語に関する能力の育成のために、小学校低・中学年の国語科において音読・暗唱、漢字の読み書きなど基本的な力を定着させた上で、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要がある」<sup>(注3)</sup>

各教科等における基礎的・基本的な知識・技能を基盤として、思考力・判断力・表現力等の育成（習得から活用へ）につなげていく必要があり、その基盤として、国語科教育における論理的な言語力（「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」）を、発達段階に応じて徹底して習得させることが重要となった。

## 3 コミュニケーション能力の基盤の育成

国語が果たす役割の一つとして、コミュニケーション能力の基盤の育成がある。人間が良好な人間関係を築くためには、良好なコミュニケーションを図っていくことが必要不可欠である。文部科学省は、「これからの時代に求められる国語力について」の中で、以下のように指摘している。

「コミュニケーション能力の基本は、相手の人格や考え方を尊重する態度と言葉による伝え合いであり、国語の運用能力がその根幹となっている。また、言葉によって多様な人間関係を構築することのできる『人間関係形成能力』や目的と場に応じて『効果的に発表・提示する能力』は、現在の社会生活の中で最も強く求められている能力の一つであるが、これらの根幹にあるのもコミュニケーション能力であり、国語の力である。」<sup>(注4)</sup>

国語科には、人間が個人として、社会の中でたくましく生き抜くための力を育成する役割がある。

## IV 研究に当たって

### 1 基本的な考え方

#### (1) 「尊重・共感し合い、関わり合う」とは

「尊重・共感」とは、互いの違いを個性と捉え、互いの立場や存在を理解すること、「関わり合う」とは、互いを理解したうえで、心を通わせること、と捉える。一人ひとりが互いに尊重・共感し合い、関わり合うことで、

認め合う学級・授業をつくることができると考える。

#### (2) なぜ、「学級・授業づくり」の両面なのか

人間は、誰しものが、自分に自信をもち、他人から認められ、より良く生きたいと願うものである。学校生活においては、多様な場（学級生活、授業等）の中で、児童それぞれが「自分らしさ」を発揮したり、互いを認め合ったりすることが大切であると考ええる。

#### (3) 「国語科を中核とすること」について

新学習指導要領では、各教科等において、「言語活動の充実」が重視された。国語科で習得した言語力を多様な場で活用していくことが求められている。「国語科を中核とすること」とは、児童の発達段階を考慮した言語活動を各教科等で行うことである。各教科等の目標の達成のために、指導計画に言語活動を位置付けていくことで、より効果的に児童に「確かな学力」を身に付けさせることができると考える。

#### (4) なぜ、「論理的なスピーチ活動」なのか

言葉として発せられる言語は、その人自体を表すと考える。論理的な（構成を意識した）原稿を基に行われるスピーチ活動には、その人の個性や人間性が良く表れ、聞く人に良く理解してもらうことができると考える。

## 2 研究の仮説

以下（表1）のように、研究の仮説を立てる。

【表1 研究の仮説】

実習Ⅰ	児童が、自分を見つめたり、他者の意見に触れたり、他者から認められたりする活動を行っていけば、児童が相互理解を図ったり、良さを認め合う関係をつくり、自己肯定感を高めたりすることができるだろう。
実習Ⅱ	児童に、論理的な文章構成の型を意識した「体験文」を書く指導を行っていけば、児童の経験や体験に基づいたその子らしさが文章に表れるだろう。また、それを伝え合うスピーチ活動を行っていけば、児童が相互理解を図ったり、良さを認め合う関係をつくり、自己肯定感を高めたりすることができるだろう。

## 3 検証の視点と方法

以下（表2）の検証の視点と方法で、研究を進める。

【表2 検証の視点と方法（実習Ⅰ・Ⅱ）】

検証の視点	検証の方法
1 児童の相互理解（尊重・共感等）を図ることができたか。（実習Ⅰ・Ⅱ）	学習シート 授業観察
2 良さを認め合う関係をつくり、自己肯定感を高めることができたか。（実習Ⅰ・Ⅱ）	学習シート 授業観察
3 論理的な文章構成の型を意識した「体験文」に、児童の経験や体験に基づいたその子らしさが表れているか。（実習Ⅱのみ）	学習シート

## V 教師力向上実習Ⅰ（刈谷市立A小学校6年A組）

児童の自己肯定感を育てる学級づくり  
—自分と他者の「良さ」を見つめる学級活動を通して—

## 1 テーマ設定の背景と児童の実態

本学級は、男子14名、女子20名、計34名の児童で構成されている。教室に掲示されていた「6年生の目標」には、児童が多様な目標を掲げている。「みんなと仲良くできる学級にしたい」「はじめのある6年生になりたい」等、その子らしい意志の表れを見ることができる。また、授業では、国語科での感想の記述や各教科等での発言等、その子らしい素直な思いや考えを表現している姿がある。

他方、学級内では、友達を傷付けたり、思いやることができなかつたりする言葉が見受けられる。また、学校生活においては、友達目を気にしたり、友達と自分を比べたりする余り、言動が消極的になったり、他人の価値観を認められず、非難したりする等の様子が見られる。

実習の事前調査として、「自己肯定感」に関するアンケートを行った。全9項目の質問に対して、4段階から回答してもらった。4段階の回答を肯定群・否定群の2つに分類した。調査結果の抜粋を以下(表3)に示す。

【表3 「自己肯定感」に関する事前調査 (%)】

質問項目	肯定	否定
自分の気持ちを素直に相手に伝えることができる。	52.9	47.1
自分のことが好きだ。	32.4	67.6
自分にはいいところがたくさんある。	8.8	91.2
自分が大切な存在だと思う。	50	50

事前調査結果より、「自分が大切な存在である」と半数の児童が感じている反面、自己肯定感の低い児童が極めて多いことが分かった。

以上の実態を踏まえ、本実践では、学級活動(構成的グループエンカウンター)と道徳によって、児童が相互に関わり合うことができる場を設定した。これにより、児童一人ひとりのコミュニケーション能力を高めること、良さでつながる関わり合いから、互いを尊重・共感し合い、自己肯定感を高めることができるよう実践を進めた。

## 2 実践の内容

### (1) 学級活動の授業

#### —構成的グループエンカウンター「Oいくつ?」—

第2週目に、学級活動の授業を行った。構成的グループエンカウンターの手法を用いて、児童が相互に関わり合うことができる場を設定した。

本時の目標は、次の3点である。①自分の良さについて、自己評価と他者評価の両面から捉え直し、自分を見つめ、自己理解を深める。②友達の良いところを見つけ、認めていく。③自分に足りないところや頑張るべきところを見つめ直し、今後の自分に生かす。

メインの活動では、まず、自分自身に対する自己評価(12項目の中から、3つを選択する)を行い、自分を見つめ直させた。次に、学級生活の様子から友達の良いところを見つける評価(12項目の中から、3つの良いと

ころを見つける)をし合い、それに対し、一言メッセージ(良いところを具体的に書く)も添えさせた。最後に、その自己評価と他者評価を照らし合わせて、自分に対する新たな気づきや自分の良さの再認識から、今後の自分に生かすことができるようにした。本活動の流れとしては、その方法を理解させることができるように、ペアワーク、グループワーク、学級全体という段階を踏んで、スモールステップで活動に取り組ませた。

### (2) 道徳の授業

#### —「夢を求めて」1-(6) 向上心・個性の伸長—

第4週目に、道徳の授業を行った。児童の向上心や自尊感情を高めたいという思いを踏まえて、授業づくりを行い、「自分の性格や好きなこと、得意なこと等の特徴を良さとして捉え、それを伸ばそうとする気持ちを高める」という目標を設定した。教材は、副読本「明るい心(6年生)」に掲載されている、愛知県に縁のある江戸川乱歩の人生を題材にした「夢を求めて」を選択した。

授業の展開について、主発問「自分の性格や好きなこと、得意なことをどのように自分の将来に生かしていきたいですか」では、自分の可能性に気付いたり、それを広げたりして、これからも自分を高め、伸ばし続けていこうとする姿を期待した。

## 3 実践の成果・考察・課題

### (1) 実践の成果—事前・事後アンケートから—

【表4 事前・事後調査結果(肯定群) (%)】

質問項目	事前	事後
自分の気持ちを素直に相手に伝えることができる。	52.9	55.9
自分のことが好きだ。	32.4	58.8
自分にはいいところがたくさんある。	8.8	23.5
自分が大切な存在だと思う。	50	55.9

結果として、全ての項目で、肯定的な回答が増加した。特に、「自分のことが好きだ」と回答している児童は、事前と事後で肯定群が26.4%(9人)も増え、学級全体の過半数を超えた。これらの結果から、児童の自己肯定感の高まりを見ることができる。

### (2) 実践の考察

#### ①学級活動(構成的グループエンカウンター「Oいくつ?」)から

振り返りの記述の抜粋を以下(資料1)に示す。

【資料1 学級活動「振り返りシート」の記述】

- ・自分では、良いと思わないものが、友達には思われていて良かったなと思った。
- ・全員から「進んで働く」に○を付けてもらったので、これからも続けていきたい。
- ・思いやりがあると書いてくれた子がいたので、これからも思いやりを忘れないようにしていきたいです。
- ・自分はないと思っていた、責任感があると書いてくれた人が4人中2人もいたのでうれしかったです。

自分の良さや個性、頑張りを友達からの評価によって再認識したり、自分では今まで気付くことのなかった自分の特徴や性格を新たに発見したりする姿を見ることができた。他者から認められたり、自分の良さに気付いたりしたことは、児童の自己肯定感を高めたり、相互理解を図ったりするために有効な活動であったと考えられる。

## ②道徳「夢を求めて」から

振り返りの記述の抜粋を以下(資料2)に示す。

### 【資料2 道徳「振り返りシート」の記述】

- ・自分の好きなことがあってこそ、将来の夢があるのだなということが良く分かった。
- ・将来、自分の好きなことを職業にできるように、好きなことをたくさん増やしていきたい。
- ・夢を叶えるためには努力が必要だなと、江戸川乱歩の話を読んで思った。
- ・今日の授業で自分の好きなことを書き、将来にどういう風に生かしていけるかは、考えてみるとなかなか思い付かないけど、将来きっと、何かの役に立っていると思うので、今、やっていることを一生懸命やり、たくさん将来の役に立てるようにしたいです。

自分の将来のために、「今できることを頑張りたい」「好きなことを増やしていきたい」という意見が多く見られた。今の自分を大切にし、自分を高めていこうとする意識をはぐくむために、有効な活動であったと考えられる。

## (3) 今後の課題

自己肯定感のような子どもの内面に関わるセンシティブな面は、すぐに成果が出るものではない。また、一定の成果が出たとしても、それで終わるのではなく、一年を通して、多様な取り組みを継続して行うことが求められる。本実践の事後調査においては、事前調査と比較して、自己評価が低くなった児童も見られた。このことから、何らかの要因により、自分自身を否定的に見てしまう児童がいるということも明らかになった。このような児童に対して、適切なフォローやアプローチを行い、児童の自尊感情を少しずつ高めていくことができるように支援・指導を行っていかねばならない。

本実践から、児童を良く見て、一人ひとりの良さや頑張りを多様な場面から捉えたり、それを認めたりすることが、教師にとって、非常に大切な資質だと感じた。また、授業内においても、児童が互いに尊重・共感し合うことができる活動を取り入れたり、児童一人ひとりが自己を肯定しながら生活することができるような取り組みを続けたりしていくことが重要であると学ぶことができた。今後は、これらの意識を常にもち続けたい。

## VI 教師力向上実習Ⅱ(刈谷市立A小学校1年B組)

小学校低学年における「習得・活用」の授業開発  
一書く力を基にした活動での相互理解を通して一

### 1 テーマ設定の背景

学習指導要領の改訂で示された「思考力・表現力・判断力等」(いわゆる活用型学力)の基盤となる言語能力を身に付けさせるためには、国語科のみならず各教科等においても、小学校1年生の段階から「記録、要約、説明、論述」(話す・聞く、書く)といった言語活動を、児童の発達段階に応じて適切に行うことが必要である。

本校は、今年度、研究発表会を迎える(研究主題は、Ⅱの3参照)。この研究主題に沿いながら、他教科においても、話型・文型や順序、構成(内容のまとめ)を考えて、分かりやすく相手に伝える能力を高めることができないかと考えた。

以上を踏まえ、本実践では、図画工作科を主として行う。国語科を中心とした系統的・横断的に指導すべき言語力の基盤育成を考慮し、児童が絵を描くだけで終わるのではなく、その絵に込めた思いや考えを文章で表現したり、相手に伝えたりする言語活動(鑑賞)を取り入れる。さらに、児童が互いに自分の思いや考えを分かりやすく伝え合うことによって、相互理解を図り、互いに尊重・共感し合うことができるようにする。また、互いの「良さ」を認め合うことで、自分の良さに気付いたり、自信をもったりすることができるようにする。

## 2 児童の実態

本学級は、男子14名、女子20名、計34名で構成されている。本校では、朝の会やモーニングタイムの時間を利用して、スピーチ活動等の言語活動に積極的に取り組んでいる。児童は、自身の体験や考えを踏まえて、楽しく活動に臨んでいるが、その内容が抽象的な傾向にあり、具体性に乏しい。また、本学級では、児童の仲が非常に良く、男女分け隔てなく関わり合うことができる。

他方、自分の気持ちをうまく伝えたり、相手の気持ちを理解したりすることができず、けんかになってしまうような状況も見受けられる。

実習の事前調査として、「話すこと・聞くこと」に関するアンケートを行った。全6項目の質問に対して、3段階から回答してもらった。調査結果の抜粋を以下(表5)に示す。

【表5 「話すこと・聞くこと」に関する事前調査】

数値：◎(3)、○(2)、△(1)

質問項目	数値
話す時、大きな声で話すことができる。	2.44
話す時、ゆっくり話すことができる。	2.61
発表する時、皆を見て話すことができる。	2.73
話を聞く時、静かに聞くことができる。	2.68
話を聞く時、話す人の顔を見て聞くことができる。	2.85
話を聞いて、質問や感想を言うことができる。	2.47

アンケート項目は、学習指導要領解説国語編「第3章各学年の目標と内容 第1節 第1学年及び第2学年『A話すこと・聞くこと』」を参考に作成した。「話すこと・聞くこと」の一般化は、人間が言葉を通じて他人とつな

がり合うために必要な要素である。

調査結果から、本校の日々の実践の積み重ねにより、児童の「話すこと・聞くこと」に対する意識は非常に高いことが分かった。しかし、「話を聞いて、質問や感想を言うことができる」の項目は、他に比べ高くなく、中には、あまり得意ではないと感じている児童がいることも見て取ることができる。この能力は、相手に興味をもち、相手を理解しようとする姿勢に関わる能力であり、児童の相互理解や互いに尊重・共感し合う人間関係へとつなげることができる。

### 3 実践の内容—図画工作科での授業実践—

#### (1) 単元指導計画

本実践において、私が担当した単元は、「えがおつうしん につこりニュース（開隆堂『わくわくするね ずがこうさく1・2上』P34）」である。

下部の表（表6）は、本単元目標と大まかな単元指導計画（4時間計画）である。

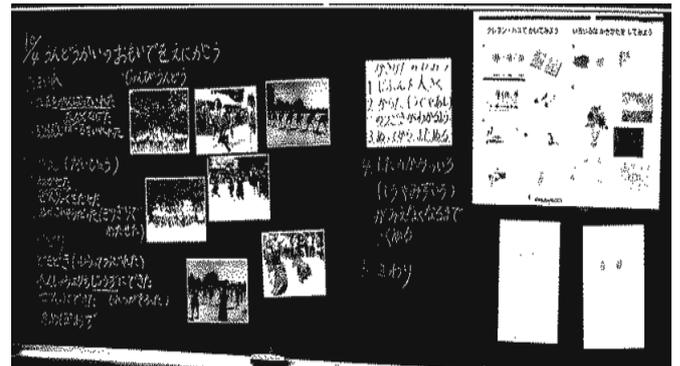
#### (2) 指導の実際

##### ①豊かに絵に表す（第1時・第2時）

本時（2時間通し）の指導においては、導入で、児童が想像力豊かに絵に表現することがように、互いに運動会での思い出（頑張ったことや楽しかったこと、うれしかったこと等）を伝え合い、気持ちや思い、考えを共有した。また、その際、運動会の競技写真を示すことで、伝え合った思いや考えが具体化され、児童も絵に表現するイメージを膨らませやすくなった。

次に、身体の動き（腕の振りや足の曲げ伸ばし等）を絵に表現することができるように、導入で用いた写真の解説・説明をした。各競技において、どのような身体の動きをしているのか、目線はどうか等、児童が絵を豊かに描く視点をもつことができるようにした。

そして、絵に表す際の要点（①自分を大きく描く、②身体の動きを意識して描く、③下の紙の色が見えなくなるように濃く塗る等）を繰り返し指導したり、様々な技法を示したシートを掲示したりし、児童がその子らしく工夫して表現することができるようにした。以下（資料3）が本時の板書である。



【資料3 表現指導の板書（第1時・第2時）】

##### ②絵の紹介文を書く（第3時）

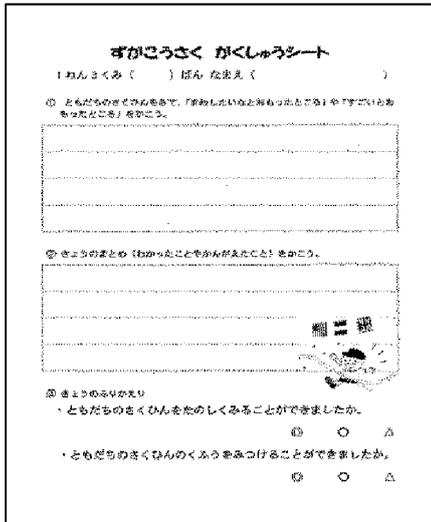
本時では、運動会の思い出（絵）を紹介するために、論理的な「体験文」（次頁の学習シート参照）を文章にまとめる学習を行った。

【表6 単元の目標と指導計画】

単元名		えがおつうしん につこりニュース（4時間完了）		
単元目標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・心に残ったことを自由に絵に表すことを楽しむ。（造形への関心・意欲・態度）</li> <li>・自分の経験したことから、嬉しかったことなど、表したいことを見付ける。（発想や構想の能力）</li> <li>・自分らしい表し方で、楽しかったことの様子を表す。（創造的な技能）</li> <li>・自分や友達の作品の良さを見付けながら楽しく見る。（鑑賞の能力）</li> </ul>		
次	時	学習過程	指導上の留意点	指導の段階
第一次	①	・運動会の思い出をクレヨンで絵に表す。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動会で頑張ったことやうれしかったこと、楽しかったこと等を想起させ、さらに、その時の写真を示しながら、絵を描くイメージをもたせる。</li> <li>・クレパスの扱い方や効果的な描法等を説明したり、実際にやってみせたりしながら、実感を伴った理解を促す。</li> </ul>	表現
	②			
第二次	③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動会の思い出（絵）を紹介する文章を書く。</li> </ul> <p>（習得型学習）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品の工夫を書くことによって、形や色、表し方等の自分の感覚や活動を整理させる。</li> <li>・「はじめ・なか・おわり」を意識した紹介文をもとに、自分の経験や考えを踏まえた文章を書かせる。</li> </ul>	鑑賞 （国語科との系統性）
第三次	④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで絵を鑑賞するとともに、それぞれが紹介文のスピーチをする。</li> </ul> <p>（活用型学習）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・良い話し方・聞き方を意識して、スピーチを行わせる。</li> <li>・聞き手は、友だちの作品を見て、面白いと思ったところや真似したいと思ったところ等を伝え、お互いの作品を鑑賞し合う。</li> <li>・聞き手は、自分の経験と比較しながら聞き、感想や質問を投げかけ、交流させる。</li> </ul>	



【資料6 振り返りシート】



子どもたちが「作品の良さ」を出し合いながら、作品を鑑賞し合うことができるように工夫した。本時の振り返りでは、学習シート（振り返りシート）（資料6）を配布し、学習の振り返りを記述させた。学習シートには、①「真似したいなと思ったところ」（友達の良

さ、工夫の認識等）や「すごいと思ったところ」（新たな発見、気づき等）、②「分かったこと」（絵を表現したり、鑑賞したりすることの楽しさや大切さ等）や「考えたこと」（今後の学習に生かす視点）、③到達目標（評価規準）の自己評価の3点を記述することができるようにした。

学習の振り返りを行うことで、学びの到達度を確認したり、新たな課題・疑問を発見したりすることができ、探究型学力（図画工作科の学習から他教科・活動への活用）につながる学習のメタ認知能力を育成することができる。と考える。

4 実践の考察・課題

(1) 実践の考察

①小学校低学年からの「書く」「話す・聞く」言語活動  
— 分かりやすく「考えや気持ち」を伝えるために —

本実践では、児童が、それぞれに異なる事実（経験・体験したこと）や思い、考えをその子らしく記述することができた。児童の記述（資料7）からは、「児童の経験や体験に基づいたその子らしさ（個性や特徴、性格、人間性等）」を捉えることができる。

【資料7 学習シート（スピーチ原稿）の記述】

・僕は、踊りについて言います。絵を描くときに工夫したところは、花びらのところで手をびんびんにしたところを描いたところ。一番嬉しかったことは、踊りの中で練習より本番が上手かったことです。練習をすごく頑張って、その力を使えて、僕は、運動会に臨めてうれしかったです。次の運動会の踊りでも練習を頑張って、その力を使えたらいいなと思いました。

・僕は、リレーについて言います。絵を描くときに工夫したところは、自分とAちゃんを描くところ。顔を描くとき、かわいくきれいに描きました。一番頑張ったことは、早く走ることです。理由は、勝ちたかったからです。ドッジボール集会で負けてしまって悔しかったからです。もう一つ頑張ったことは、力を合わせることです。これからも、皆と一緒に力を合わせて頑張ります。

・私は、リレーについて言います。絵を描くときに工夫したところは、横を向いているから、目とかを横のイメージにしました。また、雲を描きました。二組を抜かしたとき、みんなが、「がんばれー。」と言ってくれました。赤チームが一番後ろだったから、私は心で、「頑張ろう。」と思いました。リレーは大変でした。運動会が楽しかったです。心がほかほかしました。

紹介スピーチでは、相手に分かりやすく「考えや気持ち」を伝えることができるように、「上手な話し方、聞き方」を示し、意識させた。これにより、伝え合いのポイントが明確になり、児童が上手な「スピーチ活動」を目指して取り組むことができた。また、スピーチを終えた後に、①作品の良いところ、②質問・感想を伝え合う交流活動を行った。作品（絵）の良さや工夫、それに関する質問・感想に留まらず、話し手の内面に迫る質問や話し手への共感を示す感想等が出された。児童が相互理解を図り、友達と「良さ」でつながるスピーチ活動になったと考える。



【写真1 グループスピーチを行う姿】



【写真2 全体スピーチを行う姿】

②関わり合い（伝え合いや評価のし合い等）による相互理解、自己肯定感の向上

本実践では、協働作業（関わり合い）を取り入れることで、学びに対する意欲や興味・関心をもったり、課題の明確化やそれに対する新たな疑問や気づきを得たりす

ることができた。また、児童が、友達に対する新たな発見や気付き、共感等（相互理解）を得ることができた。さらに、友達から理解され、認められたうれしさや自分の思いを伝えることができた喜び（自己肯定感の向上）を感じることができた。以上のような成果を、児童の記述（資料8）から見るができる。

**【資料8 学習シート（振り返りシート）の記述】**

**【相互理解】**

- ・ A君の作品がちゃんと太陽も雲も描けていてすごいと思いました。僕も太陽も雲も描いたけど、A君の方が上手かったです。
- ・ 皆の絵を見て、すごく上手だなと思いました。
- ・ B君が大きな声だったからすごいと思いました。

**【自己肯定感の向上】**

- ・ 皆がうなずいて聞いてくれてうれしかったです。
- ・ 上手に塗ると質問がいっぱいになるからうれしいです。
- ・ 自分の作品を「すごい」と言ってもらえてうれしかったです。
- ・ C君がちゃんとバトンを渡すところを言ってくれてうれしかった



**【写真3 評価を伝え合う姿】**

**③事前・事後アンケート調査結果より**

—「話すこと・聞くこと」の意識や能力の向上—

以下（表7）は、「話すこと・聞くこと」に関するアンケートの実践前と実践後の調査結果である。

**【表7 事前・事後アンケート調査結果】**

数値：◎(3)、○(2)、△(1)

質問項目	事前	事後
話す時、大きな声で話すことができる。	2.44	2.56
話す時、ゆっくり話すことができる。	2.61	2.79
発表する時、皆を見て話すことができる。	2.73	2.88
話を聞く時、静かに聞くことができる。	2.68	2.94
話を聞く時、話す人の顔を見て聞くことができる。	2.85	2.91
話を聞いて、質問や感想を言うことができる。	2.47	2.59

全ての項目において、数値の上昇が見られた。これは、関わり合い（学び合い・高め合い）を多く取り入れた授

業がこの一助となっていると考えられる。

上手に話したり、聞いたりすることは、どの発達段階においても非常に大切な要素であり、この意識が個々の言語能力の向上へとつながっていくと考える。

**(2) 今後の課題**

本実践では、児童一人ひとりがその子らしく、論理的に書きまとめることができたと感じている。

一方、本実践では、児童の記述を丁寧に評価することができなかった。指導と評価は別物ではなく、指導に生かす評価（指導と評価の一体化）を充実させることが重要である。そのためには、評価を「評価のための評価」に終わらせてはならない。指導の改善に生かしたり、児童の個性やその子らしさ等を見極め、児童一人ひとりの学習指導（生活指導）へとつなげたりしていきたい。

以下に、書く力の評価の観点を示す。今後、以下のような視点（資料9）から、児童の記述（書く力）を評価していくことを意識したい。

**【資料9 評価の観点（書く力）】**

- 1、表記の仕方（字形・字画、主述の対応、文体）
- 2、段落（一思考一段落、接続詞の使い方）
- 3、タイトルの付け方（キーワードによる基本型と活用型）
- 4、論理的な文章構成の「型」の習得と活用
- 5、エピソード（出来事）の選択と妥当性（資料も含む）
- 6、描写（語り）の方法
- 7、内容の個性（何を選び、どのように感じているか）

**VII 国語科教育の視点から**

**1 国語科教育における学習の系統性**

学年段階・学校段階で系統的な指導を行うことで、児童に確実に学力を身に付けさせることができる。

本実践で行った「スピーチ活動」（「話すこと・聞くこと」）について、小学校低学年から中学校3年生までの考察を行う。系統表については、次頁に示す（資料10）。

**2 教科カリキュラム及び学校カリキュラムとの横断性**

国語科を中核とした「スピーチ活動」で身に付けた言語力（話す・聞く力）を、教科カリキュラム及び学校カリキュラムの中で横断的に生かし、各教科等の目標を達成するための言語活動を設定していくことが求められる。

教科カリキュラム及び学校カリキュラムとの横断性について、本実践で担当した小学校第1学年で考察を行う。横断表については、次頁に示す（次頁、資料11）。

**3 国語科「書くこと」「読むこと」への視点**

本稿では、国語科「話すこと・聞くこと」の「系統性」と「横断性」について考察し、その指導事項を明らかにした。これらのような学習の体系化は、「話すこと・聞くこと」についてだけでなく、「書くこと」「読むこと」についても明らかにされる必要がある。また、「書くこと」「読むこと」の指導事項を体系化することや、さらには、「書くこと」「読むこと」の実践によって、児童の相互理

【資料10 教科カリキュラムの開発—「話す・聞く力」の系統性—(小・中学校)】

学習指導要領解説国語編を基に、荒木が再構成(2014.2.10)

学校段階 学年段階	小学校			中学校		
	第1～2学年	第3～4学年	第5～6学年	第1学年	第2学年	第3学年
話題設定や取材	ア 身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと。	ア 関心のあることなどから話題を決め、必要な事柄について調べ、要点をメモすること。	ア 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報を関連付けること。	ア 日常生活の中から話題を決め、話したり話し合ったりするための材料を人との交流を通して集め整理すること。	ア 社会生活の中から話題を決め、話したり話し合ったりするための材料を多様な方法で集め整理すること。	ア 社会生活の中から話題を決め、自分の経験や知識を整理して考えをまとめ、語句や文を効果的に使い、資料などを活用して説得力のある話をする。
系統性	思い出す	調べ、要点をメモする	知識や情報を関連付ける	話の材料を人との交流を通して集め整理する	話の材料を多様な方法で集め整理する	経験や知識を整理して考えをまとめる
話すこと	イ 相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すこと。	イ 相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話すこと。	イ 目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。	イ 全体と部分、事実と意見との関係に注意して話を構成し、相手の反応を踏まえながら話すこと。	イ 異なる立場や考えを想定して自分の考えをまとめ、話の中心的部分と付加的な部分などに注意し、論理的な構成や展開を考えて話すこと。	
系統性	順序立てて話す	理由・事例を挙げる筋道を立てて話す	話の構成を工夫し、的確に話す	話の構成を工夫して話す	論理的な構成や展開を考えて話す	
話すこと	ウ 姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すこと。	ウ 相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すこと。	ウ 共通語と方言の違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。	ウ 話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方、相手に分かりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かして話すこと。	ウ 目的や状況に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話すこと。	イ 場の状況や相手の様子に応じて話すとともに、敬語を適切に使うこと。
系統性	姿勢や口形、声の大きさや速さ、発音	相手を見る、言葉の抑揚や強弱、間の取り方	言葉遣い(共通語と方言)	言葉の調子、語句の選択	資料や機器の活用	言葉遣い(敬語)
聞くこと	エ 大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くこと。	エ 話の中心に気を付けて聞き、質問をしたり感想を述べたりすること。	エ 話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。	エ 必要に応じて質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理すること。	エ 話の論理的な構成や展開などに注意して聞き、自分の考えと比較すること。	ウ 聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものを見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりすること。
系統性	興味をもって聞く	質問をしたり感想を述べたりする	自分の意見と比べるなどして考えをまとめる	自分の考えとの共通点や相違点を整理する	自分の考えと比較する	自分のものを見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりする

注1 「系統性」の行は、小学校第1学年～第2学年から中学校第3学年までの指導事項を系統的に示した考察である。

2 傍線部は、荒木による各学年段階の指導事項において重要だと思われるものの考察・まとめである。

【資料11 国語科「スピーチ活動」の横断性—各教科等の指導事項のポイントから—(小学校第1学年)】

各教科等の指導事項を基に、荒木が横断的に整理(2010.2.10)

カリキュラム	指導事項
算数	計算の意味や計算の仕方を、具体物を用いたり、言葉、数、式、図を用いたりして表す活動(算数的活動—イ)
横断性	言葉を用いて、 <u>順序立てて表す</u> (内容—イ)
生活	具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えさせるため、 <u>見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動</u> を工夫すること。(指導計画の作成と内容の取扱い—2(2))
横断性	多様な学習活動を行う際、 <u>順序立てて話す、興味をもって聞く</u> (内容—イ、エ)
音楽	楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気付くこと。(B 鑑賞(1)—ウ)
横断性	<u>順序立てて言葉で表す、姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して言葉で表す、興味をもって聞く</u> (内容—イ、ウ、エ)
図画工作	感じたことを話したり、友人の話の聞いたりするなどして、形や色、表し方の面白さ、材料の感じなどに気付くこと。(B 鑑賞(1)—イ)
横断性	<u>順序立てて話す、姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して話す、興味をもって聞く</u> (内容—イ、ウ、エ)
体育	体づくりのための簡単な運動の行い方を工夫できるようにする。(A 体づくり運動(3) 思考・判断) 器械・器具を用いた簡単な遊び方を工夫できるようにする。(B 器械・器具を使つての運動遊び(3) 思考・判断) 走ったり跳んだりする簡単な遊び方を工夫できるようにする。(C 走・跳の運動遊び(3) 思考・判断) 水中での簡単な遊び方を工夫できるようにする。(D 水遊び(3) 思考・判断) 簡単な規則を工夫したり、攻め方を決めたりすることができるようにする。(E ゲーム(3) 思考・判断) 簡単な踊り方を工夫できるようにする。(F 表現リズム遊び(3) 思考・判断)
横断性	工夫を話し合う際、 <u>順序立てて話す、大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞く</u> (内容—イ、エ)
道徳	自分の考えを基に、書いたり話し合ったりするなどの表現する機会を充実し、 <u>自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること。</u> (「第3章道徳」の「第3指導計画の作成と内容の取扱い」の3)
横断性	思い出して自分の考えを深める、 <u>姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して話す、興味をもって聞く</u> (内容—ア、ウ、エ)
総合	問題の解決や探究活動の過程においては、 <u>他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動</u> が行われるようにすること。(指導計画の作成と内容の取扱い—2(2))
横断性	<u>分析し、まとめたり表現したりする、姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して話す、興味をもって聞く</u> (内容—ア、ウ、エ)
特別活動	[学級活動]、[児童会活動]…よりよい生活を築くために集団としての意見をまとめる等の話し合い活動…を充実するよう工夫すること。 [学校行事]…体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するよう工夫すること。(指導計画の作成と内容の取扱い—2(1)、2(2))
横断性	<u>順序立てて話す、姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して話す、大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞く</u> (内容—イ、ウ、エ)

注1 「横断性」の行は、小学校第1学年の指導事項と「話すこと・聞くこと」との横断性の考察である。

2 傍線部は、荒木による考察・まとめである。

3 内容ア～エは、小学校第1～第2学年の指導事項「話すこと・聞くこと」の内容である。

解や自己肯定感の向上の一助となるのかを検証していかなければならない。その実践研究や省察、検討・改善等については、今後の課題としたい。

## Ⅷ おわりに

### 1 言葉の力を基盤にした「自立・協働・創造」

人は、言葉を通じて感情や気持ちを理解し合うものである。言葉によって、自分自身の思考を深め、他者と関わり合い、思いを共有し合うことで、「自立・協働・創造」する力を身に付けることができると考えられる。

### 2 小・中高の系統的な学び

新学習指導要領では、身に付けさせるべき言語力を明確にし、系統的に指導・評価することが重視されている。小・中高の教科の系統性を意識し、学年段階・学校段階の指導事項及び到達目標（どの段階でどうなればよいのか）を明確にしておくことが求められる。

### 3 横断的な学びとカリキュラム開発

国語科で身に付けた論理的な言語力を活かして、各教科等の目標を効果的に達成するために、国語科と各教科等との関連を図りながら、指導計画（カリキュラム）に位置付けていくことが大切である。その際には、言語力と言語活動を区別し、言語活動を通じて、各教科等でどのような能力を育成するのかという視点を明快にしておく必要がある。

### 4 今後の展望

教育実習では、毎日のように指導したり、関わったりする児童がいた。その子の良さや頑張りを褒めたり、認めたりすると同時に、時には、毅然とした態度で指導に当たり、私の思いを伝えようと努力した。しかし、なかなか私の思いを分かってもらえず、そのことが非常に悔しかった。そんな中で、その子が実習最終日に、「いろいろなことをたくさん教えてくれてありがとう」というメッセージを私にくれた。今までの苦労が少し報われたと感じたとともに、その子の心に少しでも何か残すことができたと感じた瞬間であった。

教職大学院での2年間で、非常に多くの人と出会い、たくさんの学びを得ることができた。これからも一つひとつの出会いを大切にしながら、理想の教師像に向かって、努力し続けていきたい。

#### 【注記】

注1)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(中央教育審議会答申、2011)

注2)『小学校学習指導要領解説 国語編』(文部科学省、2008.3)

注3)『小学校学習指導要領解説 総則編』(文部科学省、2008.3)

注4)「これからの時代に求められる国語力について」(文部科学省、2004.2)

#### 【主な参考文献・資料】(注記は除く)

##### 1 文部科学省関係

「第2期教育振興基本計画」(中央教育審議会答申、2013年6月閣議決定)、「児童生徒の学習評価の在り方について(答申)」(同、2010)、「第2期教育振興基本計画」(同、2013.6)、「これからの時代に求められる国語力について」(文部科学省、2004.2)、「評価基準作成のための参考資料(小学校)」(国立教育政策研究所、2010)等。

##### 2 実習校関係

『平成25年度 学校経営案』(刈谷市立A小学校、2013)、『生き生きと伝え合い学びを深めていく子どもの育成～確かな言語能力を習得し、伝え合う喜びを感じる授業づくり～』(同、2013.11.15)等。

##### 3 国語科教育関係

新しい国語教育を創造する会編著『小学校新学習指導要領の展開 国語科編』(明治図書、2008年)、河野庸介編著『中学校新学習指導要領の展開 国語科編』(明治図書、2008年)。

##### 4 実践関係(1)

左近妙子「書くことの指導」『教育科学国語教育2010年10月臨時増刊号』(明治図書)、加藤洋佑『『思考力・表現力・判断力』を育てる鑑賞文指導』(日本国語教育学会・全国大会発表資料、2013.8.6)、有田弘樹(教職大学院卒業生)「伝統的な言語文化(古典)における『習得』『活用』の授業・評価開発—『平家物語』『扇の的』(光村・中二)を例に—」(豊橋市立A中学校、2011.10)、半田恵子(教職大学院卒業生)『『習得』『活用』の学習課程とスピーチ活動を生かした討論の授業開発—『豊かな言葉の使い手になるためには』(光村図書、5年)—」(一宮市立B小学校、2011.10)、鈴木大文(教職大学院院生)「どの生徒も書いて話せる『わかりやすく論理的なスピーチ指導』」(豊橋市立C中学校、2013.6)等。

##### 5 実践関係(2)

佐藤洋一(講演資料)「なぜ国語を学ぶのか—勉強が好きになる5つの力—」(2012)、同「日本子ども達に足りない点は?—『言葉』と向き合い背景を読み取る力、判断・批評、想像力・創造力—」(2013)、同「教師のためのコミュニケーション論」(同)、同「授業力の基礎・基本」(講演要旨、第1回「愛知県教育委員会指定・ことばの学習活性化推進事情」尾張旭市、2013)、同監修『わかる国語(小学校国語の総合的研究)』(旺文社、2012)、同編著『国語科『習得・活用型学力』開発と授業モデル(全4巻)』(明治図書、2011)等。

#### 【付記】

教職大学院2年間の主な実習は、以下の学校で行わせていただきました。「学校サポーター活動」「教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ」(刈谷市立A小学校)、教師力向上実習Ⅲ(名古屋市立B小学校)、特別課題実習(豊田市立C小学校)、多様なフィールド実習(名古屋市内社会教育施設)。

実習中におきましては、多くの先生方にご指導・ご助言をいただきました。今回この場でお名前を挙げることはできませんが、お世話になったすべての先生方に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、学校サポーター活動や教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、修了報告書等で熱心にご指導をくださった佐藤洋一先生、多様なフィールド実習でご指導をくださった志水廣先生、温かくご指導・ご助言をくださった教職大学院のすべての先生方に心から感謝申し上げます。教職大学院での学びを4月から始まる教員生活で生かし、今後受け持つ子どもたちに尽くしていきたいと思っております。本当にありがとうございました。